

【一般演題1】 第5席 「『灸法要穴』の構成からみた江戸中期灸法の展開」

東京 北江 瀧也

16世紀になって、衰退していた本邦の鍼灸は明医学の影響下で独自の発展を示すようになった。曲直瀬道三、玄朔さらに饗庭東庵、味岡三伯にいたりその発展基盤は確立した。しかし道三以降彼らの功績の大半は歴史に埋没したまま、しかるべき評価と検討を受けていないのが現状である。このことは江戸期の鍼灸像を不鮮明にしているだけでなく、現在の鍼灸を検討する上での基盤を欠いていることと言える。とりわけ現在、灸法が鍼法に比して低迷しているのは、歴史的な蓄積をふまえた認識あるいは情報の欠如のためである。

『灸法要穴』は、元禄8（1695）年の刊本『経穴機要』の原本で、いくつかの異本が存在する、灸療の専書である。著者については、浅井周伯（1643～1705）の名が挙げられる。浅井周伯、名は正純。周璞、策庵とも号す。尾張浅井家の医系第三代目である。医を味岡三伯に学び、味岡家の四傑と称された逸材の一人である。本書の内容は概ね諸書の引用で構成され、その書目は『類経』など12種に及ぶ。本書には1600年代後半から1700年代にかけての写本や注解書、増補本などがあり非常に流布したものと思われる。本書を解析することにより、江戸中期のオーソドックスな灸理論が浮き彫りになるはずである。

